学会創立20周年記念OS

異種異質連携･産学連携を再考する

本学会創立以来を振返り次の20年を構想する

産学官公民金連携=事業組織と研究者･学会の連携が生むもの

湯本　長伯

社会構造設計研究所所長・工学博士
九州・大学開物成務塾塾長

『創立者・初代会長として任された部分の範囲で、
設立時の様々を振返り未来に向けて提言する』

①設立　学会機能を持つ（基本ロジック/事例収集･研究発表/ＤＢ化/整理･類型化･体系化･構造化/理論の創出）狼型狐型脱却＞
②創造的研究議論　体験知を上げつつ内部で異種異質の衝突を創出
③外部異種異質との連携融合創出　異種異質連携を多角的に創出
④異種異質の醸成と発見　常に多様性と独自性を意識し活用する

①学会設立時の状況と産学連携学への想い

２１世紀に入ったばかりの2003年３月に東京･都道府県会館で設立総会を開き、満場一致で設立に至った産学連携学会ですが･･

進め方は無茶苦茶で、既に限界が見えていました　＝＞学会設立へ

21C初頭の産学連携実態は惨憺たるもので、企業の技術分野ＯＢが大学に採用され、先ずは『大学と企業を結び付けること』だとばかりに、リサーチも戦略も無く彼方此方を訪ねて回り、様々な案件を大学に持ち込むような事態が続いていました。その上で産学連携推進のためと称し大勢で研究室に押しかけ『従来の大学教員がしたことも無い産学連携活動への参加を強要する』狼型産学連携や、『産学連携活動に邁進すれば多額の研究費が得られて研究が一気に進む』と騙す狐型産学連携など、今後に悪い傷跡を残しそうな活動が溢れていました。

　関わる人は疲弊し結局はみな討ち死にしてしまうことが明らかという状況で、何とか関わる情報と人を集め、現状を明らかにし、それらの情報を整理・体系化・構造化し、１つ１つの事例が無駄にはならず、少なくとも次への肥やしになる仕組みが必要だったのです。

★　産学連携学展開のためのフォロー

※　展開のための講演テーマ

１『産学連携の比喩類型学』（狼型、狐型、猪型、ネズミ型、象型、モグラ型、狸型(九大型)、等々）
（狸型＝憎まれない･愛される 産学連携活動）
２『学会類型の研究』（対象学、分類学、類型学、方法学、道具学、等々）の2つで、此れらは産学連携と産学連携学を常に客観視するという、一歩引いた姿勢の共有だった
３『熱意の発揮が重要』という当たり前のこと

※対象の全情報を収集/発表/分類/整理/類型化
体系化 構造化 予測 理論化

②創造的学会 陳腐を排除し、より創造的な場を創る

多くの学会協会設立に関わった経験から、多くの学会協会が10年も経たないうちに事実上の活動休止に陥ることを観ていました

定型的な会議･大会総会･委員会･研究会等々を、型通りに行っている団体は設立時の熱気が冷めると急速に冷え込み、会員数が減少し財政が逼迫し、その循環で息絶えます。「継続する新しい何か」がないと持たないのは、学会も協会も、国も社会も同じです。

本学会は徒に前例を繰り返すことに頼らず、少しずつでも新しい何かを付け加えて来ました。私自身が新しい学会に独自に付加したのは、『シンボルマーク・プロメテウスの火』や『メールニュースの紙面デザイン』などが表立つものですが、その他にも少しずつあります(Ex. 知財の幅広い把握/知財権移転)。

※また２代目会長・荒磯恒久氏は短時間で第１回の大会を準備し、その独特の大会発表番号（発表の日時・室・セッション内順番号）は、21回の大会でずっと踏襲されて来ました。また第３代会長・佐竹弘氏は、学会を運営する事務局の体制を重視して、大学内にあっても問題視されないようにきちんとした体制を整えました。初代からの仕組みが第２代で切れてしまったのは残念ですが、こうしたフォローと積重ねが学会の存続にとって大事な蓄積です。

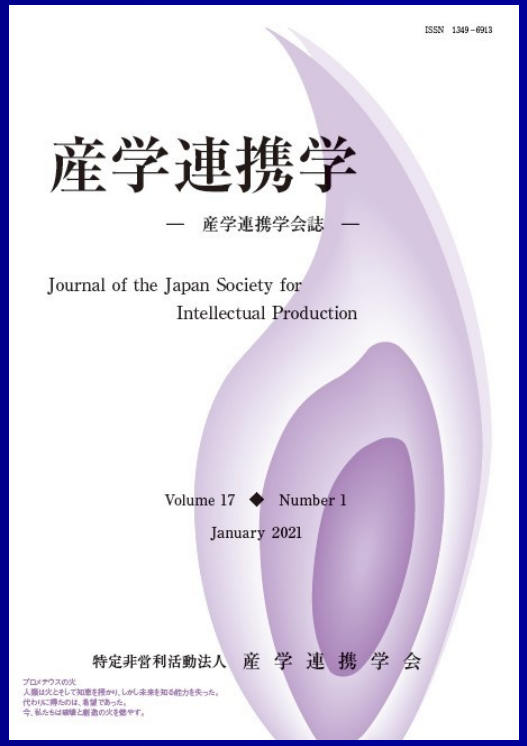
「プロメテウスの火」の図像とキャプション

（第1回大会発表梗概集・近年の論文集各表紙への使用）

最初期の図像とキャプション

最新の図像とキャプション

学会誌等への使用だけでは不十分？



学会メディアへの使用⇓幅広い使用

折角の知的資産を、表紙だけでは勿体ない

【プロメテウス概念のシンボル性】

西欧を中心に定着している物語性を活かす

H・フーガー

名は「先に言う／先見の明ある者」の意で、予知力を持つ巨人神ティターンズ。人類に天界の火（と、それを使う知恵）を与えた（←図）。エピメテウスの兄、アトラースの弟。人間を神と区別し無知のままにしておこうとする絶対神ゼウスに逆らい、天界の火を盗み運び与えた（←図）。火は、破壊力防御力、それを使う知恵の象徴で、文明や技術の象徴でもある（ギリシャ神話）。

J・コシエール

巨人神ティターンズは、天空の王ウラノス（最初の宇宙の王）を追った時間の神クロノス（二番目の宇宙の王、巨人神の長、ゼウスの父）の一族だが、プロメテウスはゼウスに協力した。

G・モロー

しかし人間に火と知恵を与えたため、ゼウスの怒りを招き、山に幽閉された（←図）。そして毎日、大鷲に肝臓を食いちぎられる責め苦を受ける。彼は神であるので1日で元に戻り、不死を捨てない限り同じ苦しみを永遠に受ける運命であったが、ヘラクレスに救われる。

【シンボルマーク】
知的財産権としての権利関係の整理

知的財産権としては2つに分けられます。学会という組織の存在と活動を補強する意味で設定した『商標権』と、知的作業の成果・生産物としての『著作権』です。

○商標権

2006年頃に、組織としての『産学連携学会』に無償譲渡しており、現在の特定非営利活動法人・産学連携学会が、それを継承しているものと理解されます。従って商標としての権利者は学会であり、使用そのものは学会に権利があります。（登録：2003年）

○著作権

著作権は譲渡等は一切しておらず、著作権行使（複製、複製の頒布、等々）権は原理的に湯本個人にあるという二重性があります。個人としては、学会の著作権行使に異論は一切無い（そのためにデザインした）ので、此のシンボルマーク（キャプション含む）の『著作人格権の一部としての同一性保持権』のみ防衛します。即ち、『原デザインを著しく損なう改変を加えて著作を使用すること』のみ、権利者として異を唱えます。

主に「プロメテウスの火」と称する炎が揺れるデザインが著しく改変されている、炎のデザインの意味を補強する意味で付加した「キャプション」が改変されているor付加されていない、というような場合は原著作権者として異を唱えるケースです。色彩は原則的に問いませんが、美しくないものは修正を要請します。

このマークを使用し、学会活動の中心たる論文集や大会が、コロナ禍に負けず盛会となることを祈ります。

【C. まとめとシンボルマークの活用について】

シンボルマークは、学会論文集と大会予稿集の表紙に用いられ、既に学会内には定着している。また「プロメテウスの火」の商標権については、初代会長を退いた際に学会に無償譲渡している。従って、学会としては此の知的財産権を幾重にも活用して、例えばホームページにもシンボルマークとして使用し、他学会との差別化を図るべきである。

今後の展開は、本学会が今後何を為すべきかと併せ、更に整理と事業アイデアを含めて、今後に示したい

↓

○先細りする学会現状

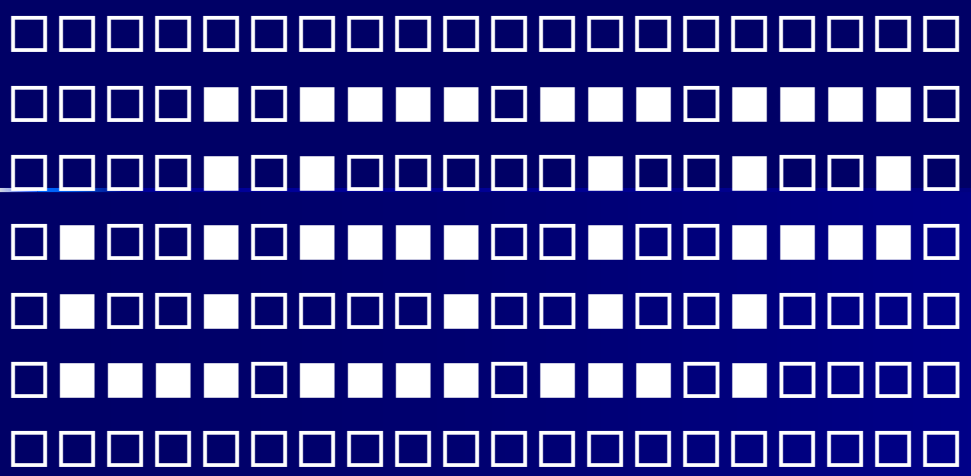
背景にある、会員数減少が続く等衰退する学会現状に鑑み、さらに本学会のブランディングを強化を図るためにも、シンボルマークのさらなる活用を考えたい。

○まとめ

多くの学会が設立されるが、少なからざる学会は次第に活動が定型化し陳腐化し会員への魅力を失い、会員数減少や収入減に悩み、経営資源の枯渇の中で消えて行く岐路を辿ることになる。

本稿で述べた『学会メディアの再編』と、『学会シンボルマークのさらなる活用』を、今後の本学会運営に生かして戴きたいと念ずる次第である。今後の学会事業と併せて、更に考察を深めたい。

【メールニュースのデザイン】



産学連携学会メールニュース

J-SIP Mail

発行：産学連携学会（編集WG）

第0001号 ＜2003.6.25＞

前発表(2019年)では学会設立時に迅速な情報伝達手段としての電子メールに注目。
速く簡単に低コストで「情報伝達」が出来る手段として従来の印刷媒体による手段を補完助けるものとして「形式、方法」等を設計したことを示した。

大方は上手く（支障なく）行っており、的確に情報伝達する機能を果たしていて設計結果としては十分な評価が出来る

↓

結論）　当初設計としては十分で今後も役に立ち得る
しかし当初設計目的である「迅速に簡単に的確に低コストで情報伝達」の手段だけではないと再認識＞更に展開

使い方・活用設計を拡げる必要あり（1995～96年頃に電子手段による情報伝達を設計し始めた頃に戻り原点から再考する）⇒MNを告知・討論・報告の中心とする
ウェブシステムとの更なる連動（MNで知らせ詳細はウェブに、の拡大）

③大会・研究会の盛り上げ

学会活動で大事なのは、毎年及び個々に開催される大会や研究会の盛り上げというと下世話な表現だが、その1つ1つの熱気や情報的価値の評価が学会の評価に繋がる。毎回の事業の盛上げ不足が活動停滞に繋がる

第2回大会を福岡・九州大学で主管し、新しい試みとして『内閣府・各省等の官との連携強化』、『各大学学長シンポジウム』、『地域や全国の産学連携組織との広範な連携』等々を行った。特に当時は各大学の学長権限が強化され学長の対応が重視される時期に入りつつあったための試みであったが、現在はどうであろうか？各地域・各大学のバラバラ感が強まった印象はある。常に学会員が知りたいと思うものを提供する必要！

研究会は色々な試みをしたが、正直なところ全てには手が回らず残念な想いは今でも残っている。此れは次の世代の会長・執行部がNEDOやJSTとも連携し、また地域の様々な組織・団体とも連携を深めて大きく拡げて貰えたので、幸いであった　＝＞　更に展開できる余地はある

④各セクター・組織・団体との連携協力

学会で大事なのは、毎年及び個々に開催される大会や研究会という本来活動も重要であるが、一方で多様な外部との連携も活動の熱気や情報的価値の評価向上に繋がり、学会の評価を上げる。連携協力の威力である

初代だけでは力不足ではありつつも、JSTやNEDOなどの中央省庁外郭団体や、経団連、商工会議所、等々の半官半民の団体も各地で連携出来るよう支援したが、もう少し明確な指針を立てたかったところである。
しかし中小機構や中小企業家同友会とは、企業の大多数を占める中小企業支援のために、色々な形での連携は出来た。九大芸術工学研究院との共同研究として、中小機構のロゴマークをデザインしたり、少し毛色の違う共同研究も試行。また同友会とは福岡で連携協力して開物成務塾を設立、後に福岡市との連携活動ともなり、活発な活動を行った。開物成務塾活動は、産学連携学会でも、特別賞の表彰を受けている。

⑤まとめと今後への提言提案

学会で大事なのは、毎年及び個々に開催される大会や研究会という本来活動も重要であるが、一方で多様な外部との連携も活動の熱気や情報的価値の評価向上に繋がり、学会の評価を上げる。連携協力の威力である

初代では力不足で至らないことも多かったが、幸い我が国社会の中では多くのニーズが寄せられ感じられ、学会活動も順調に船出し進んで来た。しかし眼前の様々なことに追われて、何のための学会活動か明確な基軸を失ってしまうと、学会としての生命が失われることになる。産学連携関係者の過剰多忙も大きな障害である

　此の記念大会OSを機に、学会としても個人としても進むべき方向の手掛かりを得たいと思う。私自身が今後に向けて準備して来たのは、外部に向けて働き掛ける『イグイノベーションコンテスト事業』や、内部の活性化に貢献する『メールニュース上での議論の場創出』、『我が国各地の多様性を踏まえた異種異質連携の基盤研究』等々で、各地の多様性発掘は、支部活動の強化にも繋がる。

先ずは有志で議論しながら、様々な方向性を探りたい

多様性の中に独自性・異種異質性を涵養する

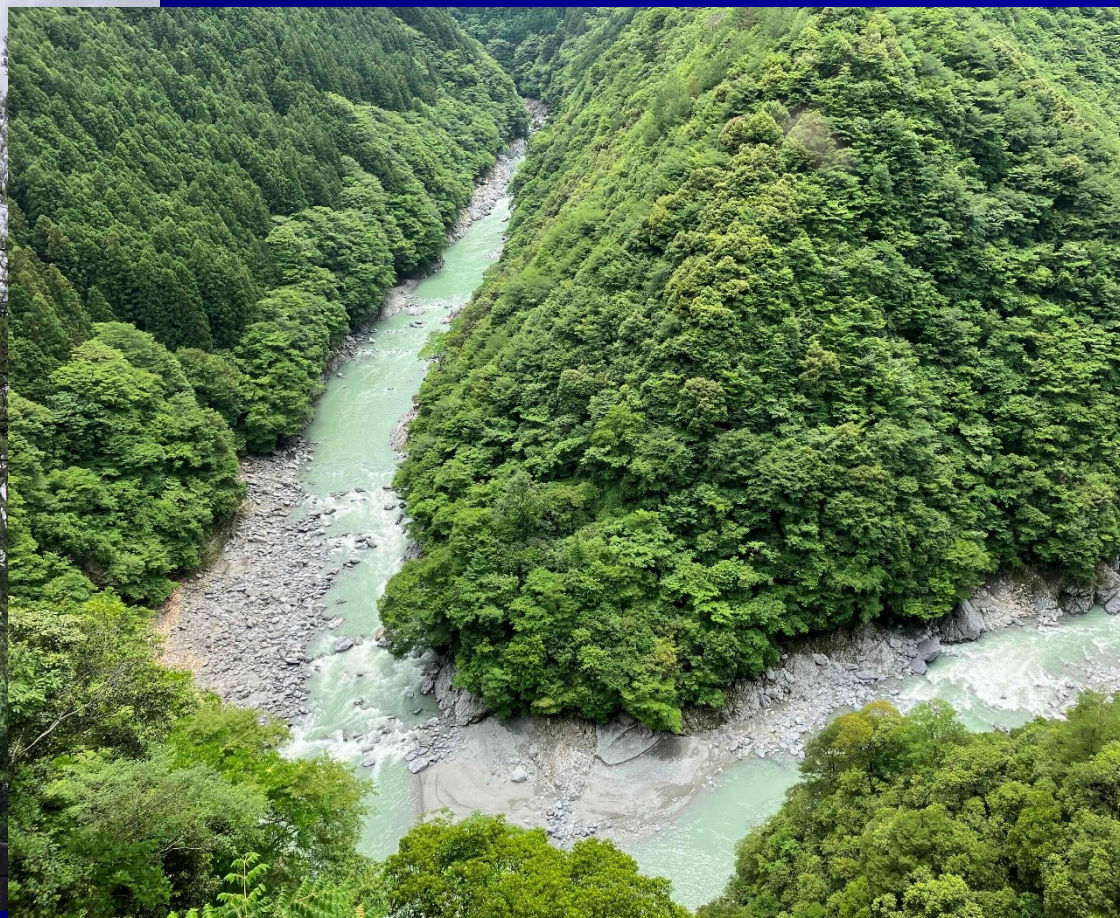
四国はプレートが涵養した異種異質の宝庫で融合体（佐川地質館）

四国の地質

四国は地質学的に「領家帯」「三波川帯」
（秩父帯・黒瀬川帯・三宝山帯）」「四万十帯」と
に分けることができます。それぞれの地質帯で
り立ちが異なります。そのため、見られる岩石の
います。

領家帯・・・約1億年前に高温低圧の変成作用を受けて
三波川帯・・・約1億年前に低温高圧の変成作用を受けて
秩父累帯・・・約1億年～4億年前にできた地層
四万十帯・・・約1500万年～1億年前にできた地層

四国・高知の異質性を創造性に活かし繋げる
谷の深さ=陰影の濃さ



FIN　ご清聴有難うございました

○現代の学会は毎年同様の事業を行うことでは最早や生き残れない。いま何を為すべきかを深く考えながら、幸いにも現有する様々な『知的資源』を生かしつつ活気を取戻し社会的責務を果たして行くべきである。

【学会レビュー】という年次活動も取り入れるべき？
（大会毎にその年次の研究発表を整理し、次年度に向けて求められる研究の方動向を考えて発表する（海外学会）

◇社会変革のための共通理解の醸成
◆社会における公共のイメージ造りと共有
■プログラムで導かれる希望と同意の過程
□結果としてのプログラム・計画は知財となる